

佳作

テーマ…誰かのために、わたしができること 「一通のメールから始まった国際貢献」

神奈川県・洗足学園高等学校1年 杉本理紗

二〇一五年三月。太平洋の南方に位置する島国バヌアツ共和国はサイクロン「パム」の直下にあった。パムは竹などを利用して建てた住民の家を破壊し、首都にあるコンクリートでできた建物の壁も吹き飛ばした。バヌアツは壊滅的な被害を受けた。日本でも大きなニュースとして報道された。しかし、私はそのニュースをテレビで見ただけのもの、バヌアツがどこにあるのか、どんな人が生活し、どんな歴史があるのか、全く気にも留めず、いつものように学校に登校した。

当時中学三年生だった私たちは当初、一介の中学生がバヌアツのために役立つことをするのは不可能だと思っていた。しかし、友人らは先生の提案で支援活動を始めていた。学校の中で募金活動をして赤字に寄付していた。アメリカ育ちである私は、友人らの積極的な活動を見て、じっとしていられなくなった。アメリカに住んでいた時、ハイチ大地震や東日本大震災が起こった。テレビで苦しんでいる人々を見て、自分から募金活動や支援活動をしたことを思い出したのだ。

私は友人らの支援活動に加わった。だが不安もあった。バヌアツをサイクロンが直撃した日から二か月が経っていた。「これ以上やることがあるのか」「募金以外でどういう支援ができるのか」と悩んでいた。バヌアツ再建のため、お金が必要なのは確かだ。ただ「果たしてお金だけで全てが解決するのだろうか」という疑問が頭を離れなかった。

その答えは、交流していたバヌアツ親善大使の相川梨絵さんがもたらしてくれた。「バヌアツの人はお金をもらってもどう使えばよいのか分からない」と話してくれた。私たちは七月下旬に横浜市でビーチバレーボールの世界大会が開かれ、世界中からトップ選手が集まり、バヌアツ代表選手も来日することを知った。「このイベントを通して支援したい」と思った。バヌアツの主要産業は観光業だが、サイクロンの

影響で観光客が減っていた。世界が注目する大会で、バヌアツの観光をPRするビラを配ってアピールすれば支援になるのではないかと考えた。

だが、すぐに壁にぶち当たった。この大会は国際バレーボール連盟の公式試合。会場内で勝手に活動することは許されなかった。みんなが諦めかけていた頃、私は得意な英語を使って国際バレーボール連盟の会長に今回の企画をメールで送ってみた。すると奇跡は起きた。日本の大会主催者に活動を許可するよう働きかけてくれたのだ。私は嬉しくてたまらなかった。私の小さな行動が大きな組織を動かした。

これで大きなバヌアツ支援の輪が広がった。大会は約一週間にわたったが、日本語と英語で作ったビラを日本人はもちろん外国人や選手・スタッフに配った。みんな温かい言葉をかけてくれた。青年海外協力隊としてバヌアツに派遣されていた歴代隊員の方々も集まってきて、体験談を語ってくれた。バヌアツの選手と交流し支援への感謝の言葉をもらった。また私たちの活動がTBSテレビで取り上げられ、選手とともにインタビューを受けるといって貴重な機会もいただいた。バヌアツのことを多くの人に知ってもらえたのではないだろうか。

日本でも寄付や募金の活動は盛んになりつつあるが、まだ多くの人に白けたムードがある。恵まれた先進国の高校生三人では大した支援はできないと諦めていた自分も反省したい。私が送った一通のメールがきっかけで、多くの人と出会い、貴重な経験をし、少しばかりの国際貢献ができた。「誰かのために、わたしができること」はどんな人にもある。全ての人が自分から行動してみようという気持ちを強く持てば、この社会は素晴らしいものになるだろう。